

## プログラム・ノート

片桐卓也 (森 円花作品、中村匡寿作品を除く)

### 森 円花：『三番叟』(2021)

日本の伝統的な祝いの舞として引き継がれている「三番叟」。足を踏みしめる力強い舞からはじまり、中間部より徐々に加速、最後は急速な舞で締めくくられる。本楽曲もその歴史的楽式を引き継ぎつつ、現代の言語感、楽器法、作曲法を落とし込み、2021年本條秀慈郎氏委嘱でマホロバのための「三番叟」として作曲した。一柳慧氏に献呈。

～本公演に寄せて～

サントリーホール開館40周年を祝した楽曲としてプログラムいただき光栄に感じております。演奏会当日に出席が叶わず大変残念ですが、マホロバの素晴らしい演奏が、美しいサントリーホールに響くことを確信しています。本楽曲には歴史と現代性という2つのテーマがありますが、それらが対立ではなく、延長線としての発展的關係を築き、マホロバの魅力として会場の皆様にお届けできましたら幸いです。アメリカより心からのブラボーを送っております。(森 円花)

### J. S. バッハ(シャイト 編曲／木村麻耶 補)：「シャコンヌ」(二十五絃箏用編曲)

～バロックから音楽の魅力が邦楽器の響きのなかに息づく～

ヴァイオリン奏者にとって最も大事な作品にヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)作曲の無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ(全6曲)がある。そのなかのパルティータ第2番 二短調 BWV 1004の最後に置かれた大規模な変奏曲が「シャコンヌ」である。シャコンヌとは、ある決まった低音の動きの上に、様々な技巧を凝らした変奏が続く。オリジナルの場合は32の変奏によって構成される。それを他の楽器で演奏する試みはたくさん行われており、ヨハネス・ブラームス(1833～97)はピアノ用に左手のみで演奏する編曲を行った。齋藤秀雄(1902～74)などによる管弦楽用編曲もある。

木村麻耶はチェコ生まれのギタリスト&リュート奏者のカール・シャイト(1909～93)によるギター用編曲を元に、二十五絃箏のための編曲を考案した。構造も弦の素材もまったく違う楽器による新しい響きの世界に、バッハの音楽の魅力が広がる。

### カタルーニャ民謡(カザルス 編曲／本條秀太郎 三味線作曲／松岡正剛 作詞)：「鳥の歌」

～平和を祈念したカザルスの演奏が、新しい歌詞と共に蘇る～

チェリストならば誰でも一度は演奏したことがある、あるいは演奏したいと思ったことがある作品が「鳥の歌」だろう。カタルーニャ生まれのパブロ・カザルス(1876～1973)が、生地に歌い継がれるクリスマス・キャロルであった「鳥の歌」をチェロのために編曲した、短い、しかしきわめて印象的な1曲である。国連本部での1971年の演奏も世界中に放送された。

松岡正剛(1944～2024)は京都市出身で、1971年に工作舎を設立し編集者として活躍。その後、独立してジャンルを超えた「知の巨人」として、2000年からは書評サイト「松岡正剛の千夜千冊」の執筆を始めた。「鳥の歌」を連続して演奏する井上鑑みづかみのプロジェクト「連歌・鳥の歌」のために詩を書いた。その以前から松岡と共演するなど、親交のあった本條秀太郎が、彼の死後にも三味線と共に「鳥の歌」の詩を歌い続けている。時空を超えた共感の音が聴こえてくる。

## 中村匡寿：『青少年のための日本音楽入門』

### ～ブリテン：『青少年のための管弦楽入門』の主題による(2026) [世界初演]

1946年、ベンジャミン・ブリテン(1913～76)が発表した『青少年のための管弦楽入門』は単なる教育作品ではなく、各楽器の個性を鮮やかに浮かび上がらせながら音楽そのものへの驚きと歓びを伝えようとする作曲家の深い愛情が息づいている。作品は17世紀イギリスの作曲家ヘンリー・パーセル(1659～95)による旋律を主題として用い、その変奏と壮大なフーガによってオーケストラという巨大な楽器の多彩な表情を描き出した。本作『青少年のための日本音楽入門』はブリテンの方法論である既存主題を媒介として音色・様式・構造を横断的に展開してゆく発想を参照し、パーセルの主題を日本的音響の文脈へ移し替えることが試みられている。弦楽四重奏と日本楽器アンサンブルの両者は単なる対置としてではなく、音組織、発音原理、時間感覚の差異そのものを素材として関係づけられる。パーセルの主題は反復や断片化を繰り返し、楽器の紹介というよりは音色そのものの変容過程として展開される。(中村匡寿)

## 本條秀太郎(桑原ゆう 編曲)：俚奏楽『花の風雅』(1995／2026)

～かつてはレガッタの盛んであった隅田川の風景が浮かぶ～

「俚奏楽」とはあまり聞き慣れない言葉だろう。本條秀太郎が日本音楽の新しい流れとして創始した三味線音楽のひとつ、と解説される。「俚」という言葉の対になるのは「都」であり、「俚」や「鄙(ひなびた)」は「都」に対して「いなかじみた」という意味となるし、「俚謡」と書けばいわゆる「民謡」、あるいは「民間で歌われている音楽」となる。三味線音楽の源流をそうした音楽のなかに発見し、消えてしまいそうな民謡などを、現代の中に創造を加えて再び受け継いで行こうという目的で始められたという。

今回、弦楽四重奏による演奏パートの編曲を担当した桑原ゆうは1984年生まれ。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞を受賞。東京藝術大学および同大学大学院修了。日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを軸に創作を展開している。

これは、邦楽器アンサンブルと西洋楽器のアンサンブル＝弦楽四重奏のための新しい編曲。それぞれの楽器の響きの特性に耳を傾けながら、江戸時代から現代までの隅田川に関係する音楽、そして花火に代表される「祈り」をテーマに含んだ音楽が重層的に展開される。

(かたぎり たくや・音楽ライター)